

〔倭訓栞前編三十一〕むすこ 我子をいふ、息男ムスコの意、史記の註に、息は生也と見えたり、今子息と稱

す、東觀漢記に出たり、從義補注に、在胎之時、以母之臍注子之臍、故母所食從臍而入、以資於子、氣息亦然、子初在胎、依於母息、故俗名子以爲子息也、と見ゆ、

〔難波江〕むすこむすめ附むすびの神むすぶの神

むすこむすめ古き物に見えず、されど古事記中卷なる、此建内宿禰之子并九女男女七とあるを、本居

宣長は、男をむすこ、女をむすめとよめり、古事記傳廿二むすは生の意にて、苔のむすもおなじ詞に

て、古事記上卷なる、高御産巢日神、神産巢日神のむすもおなじ、その産巢を、日本書紀には、産靈と

かゝれたり、靈の字、よくあたれる文字にて、物の靈異なるを比と云、久志毘の毘もおなじ、古事記

なる産巢日は借字なり、日本紀なる産靈は本字也、拾遺集に、君みればむすぶの神ぞうらめしき、

空穂物語樓上、上人まねぬむすぶの神をしるべにて、狭衣物語に、むすぶの神さへうらめしきな

むすぶあるむすもおなじく生の意なり、古事記傳三十二紀記にむすびとあるを、拾遺、空穂、狭衣に、むすぶ

といふは、ヒラの通用と知るべし、むすこむすめともに、源氏帚木湖月本三にみえたり、その中に

むすめは、古今賀のはし書にもあり、和名抄神靈類ノ狩谷氏校注ニ詳ニアリ平田氏の古道大意利本上四にも、我む

じ生たる子ト申コトデ云々、

〔安齋隨筆後編五〕ムスコ ムスコは産子ムスコの字也、高皇産靈尊と書く、産をムスと訓ずる也、ムスメ

は産女也、ウミタル男、ウミタル女也、男女を分けず産子也、若ほとなりて苔のむすまでと云ふむ

すも生の字なり、生も産も同意也、ムスは蒸の義にて、陽陰の氣にて蒸し出す也、ウムと云ふは熟

の義にて、菓のうみて自ら落つること、月満て胎熟して出づるなり、

〔貞丈雜記人品〕一我が子の事を、人に對して、卑下して愚息といひし也、古の詞也、愚息と書て、おろ

かなるむすこトよむ也、今はせがれと云也、